



↑囃子は一般的に、鉦→小太鼓→大太鼓→笛の順で覚えていく。子どもたちは道具がなくても周囲に合わせて、体でリズムを刻む。



↑岩井さんから学べる絶好の機会と大人から始める人も多い。奥は親子で習い始めた井上さん親子（生力）。

↓10月5日に赤池十八支所の公民館で行われた同地区と生力ニュータウンによる6回目の合同練習。およそ40人が参加し、囃子の技量を高めるとともに、地域間の交流もいっそう深めた。



↑岩井さんのなめらかな指づかいによる絶妙な音のツヤ。お手製の笛は、近年竹ではなく音がゆがみにくい材質を使用。



↑赤池の習習にひかえた金田の祭り。赤池の練習に金田からも応援に駆けつける。心を一つに曲を奏でいく。

守り伝えたい伝統の旋律

福智の囃子は、その数なんと24曲。予想以上に多種である。囃子は山笠が動いているときに流す道囃子と待囃子に分けられる。道囃子は①舞臺、②曲、③齊藤寺ばやし、④花の繻袴、⑤南木ばやし、⑥おうりどん、⑦か茶碗ばやし、⑧三月三日のひな祭りの8曲。待囃子は①子守唄、②高い山から、③ひよひよ、④対馬、⑤京ばやし、⑥箱根山、⑦数え唄、⑧上、梯子、⑨関の綱引、⑩博多名物、⑪お猿三匹、⑫上野興国寺、⑬蝶々、⑭お半長右衛門、⑮昔頼朝さん、⑯お半長右衛門の16曲がある。選曲は笛がリードするため、曲の出だしはすべて笛。大太鼓が幹で小太鼓と鉦がリズムをとる。なかでも笛は難易度が高く、震えるように響かせる「ツヤ」は頭で理解しても指が動かず、加減が難しい。岩井さんは正確な囃子を後世に残したいと平成6年に24曲を冊子にまとめた。「昔は地域でのつながりが深く、囃子の伝承も途絶えなかった。しかし、今はそれが希薄。いま全曲演奏できる人はほとんどいない。教える元が絶えている状況です。伝統を守るためにせめて若い人に覚えて欲しい」。岩井喜則さんが大切にしている。囃子の響きは、いま、祭りの舞台で町中に流れている。この旋律が故郷の祭りの鮮烈な印象として子どもたちの心に焼き付く。そして囃子は、引き手と共にその呼吸に合わせて、山笠を動かしていく。



●囃子指導者
岩井喜則
古来伝承の響きを今に残す
福智囃子二十四曲の伝道師

【いわい・よしのりさん】福智囃子全24曲を今に伝える町部の祭り囃子の第一人者。俳人としても岩井鬼童の名で高名。金田公民館俳句教室で指導している。赤池松本在住、78歳。



↑今は地域の指導を子の久幸さん（赤池）が主に担っている。喜則さんは場所をおさえ、さりげなくアドバイスする。

あの音色がないと祭りは始まらない。鉦、大太鼓、小太鼓、そして笛。この雅で力強いハーンを一気に高めるのだ。山笠とともに祭りに欠かせないのが、この囃子である。町内で流れる一般的な祭り囃子は、金田稲荷神社の神幸祭に端を発し、数百年の歴史があるとも言われている。「いっしょになってもこの時期は血がたぎる」と語る岩井喜則さん78歳（赤池）。その演奏歴は70年以上、囃子の第一人者である。金田本町育ちの岩井さんは、就学前から囃子に親しんだ。当時、金田町部では春と秋に山笠が立ち、昭和10年ごろ拡張した本町通りで競争も行われ、息を切らした大人が大の字に倒れ空を仰いだという。しかし平穏もつかの間、戦中は祭りが一時途絶え、岩井さんも入隊。戦後、市丸熊次郎さんの指導を受け、岩

井さんは20歳の時に笛をマスターした。囃子は特に楽譜はなく「口伝」が習われ。見て聞いて、調子を体で覚えた。「祭り好きの祭りバカです。仕事で県外にいても、祭りとあれば必ず帰ってきましたから」と笛を手に笑う岩井さん。昭和49年に赤池に移り住み、地区の囃子指導を依頼されたから、赤池でも腕前のうわさが広まり、赤池町民会館で広く指導に当たることになった。今まで子どもたちにあげた笛は百本以上。弟子、孫弟子が増え、囃子はさらに伝わった。30年ほど前には、この囃子でNHKのテレビ番組に出演、団体名を考えた末豊前福智囃子」という名で20人の子どものたちを指揮した。現在、町内の祭り囃子はほぼ同じ調子であることから、新町になり、今では名実ともに福智囃子である。



↑手取りで丁寧にバチさばきを教える久幸さん。子どもたちはリズムを肌で感じながら、全身で打ち方を覚えていく。